



宮農情報

第33号 平成27年3月5日

「あまおう」3月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

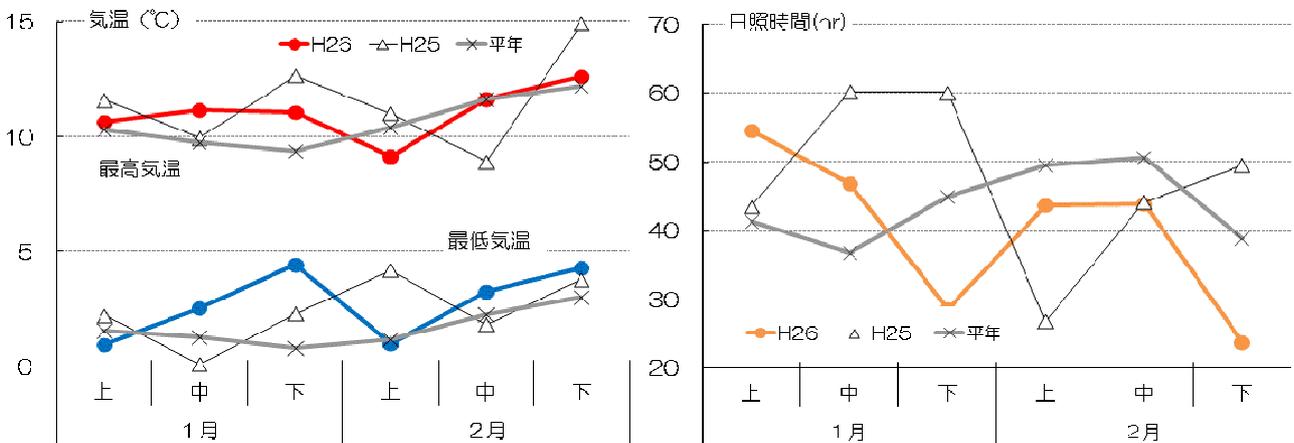
10a 当たり収量 5t以上を目指しましょう

2月上旬までの低温及び果房が連続したため成り疲れから、心葉の伸びの弱いほ場が見受けられました。現在は気温も上がってきて、徐々に心葉の伸びが良くなってきています。

2番果房は収穫終盤となっています。3番果房は現在早期作型で小指大～白熟期、普通作型で開花期～親指大が中心となっていますが、バラツキが見られます。また、摘果不足等により着果負担が大きかったほ場においては、株の立ち上がりが悪く、3番果房が未出蕾のほ場も見受けられます。そのため、3番果房の出荷開始は例年より早い見込みですが、3月中下旬の出荷量のピークは例年より小さいと思われれます。

病害虫については、灰色かび病が見られます。今後気温の上昇とともにうどんこ病の発生が懸念されます。また、引き続きハダニ類やスリップス類、アブラムシ類の発生も見られていますので、病害虫対策を徹底して下さい。

〈 最高・最低気温と日照時間（アメダス久留米より） 〉



南筑後普及指導センター管内における3番果房出蕾調査結果（調査日：2月2～6日）（%）

定植日	未出蕾	出 蕾	開花以降
9月18日以前定植	19.8(27.4)	39.9(45.1)	40.3(27.4)
9月19日以降定植	42.8(34.7)	38.6(52.9)	18.6(12.4)

()内は昨年の値

《かん水・液肥》

- かん水は、少量で回数を多く行う（目安はpF値1.7～1.8前後）。
- かん水量が多いと収穫時の果実傷みの原因となる。
- かん水時期は、果実品質維持のため収穫直後に行う。
- 気温の上昇や株の生育に合わせてかん水の量や回数を増やす。
- 土壌の急激な水分変化は裂果の原因となるので、極端なかん水管理は行わない。
- 液肥は、窒素成分で1～2kg/10aを月に2～4回に分けて施用し、3月末で終了する。

《摘果・果梗の除去・芽の整理》

- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 芽数は4～5芽を確保し、極端に小さいわき芽は除去する。
- 3番果房以降の着果数は、着果負担や果梗の強さを考慮して3～5果/枝にする。
- 株疲れが見られる場合は摘果を強めに行う。
- 過繁茂になっている株では、果実にかぶっている葉を除去する。

《温度管理》

- 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理をする。
- 夜温7℃以上が続く場合は、夜間も換気したままにする。
- 3月下旬以降は、遮光資材（塗布剤、寒冷紗など）を活用し、昼間の昇温対策を図る。
- 塗布剤は、1回目は薄めに塗布し、4月以降に追加塗布する方法が望ましい。

【 3月以降の温度管理の目安 】	
昼間	低めの管理（午前：18～20℃ 午後：18℃以下）
夜間	5℃（夜温7℃以上は開放）

《軟果対策》

- 高温期は、果実の着色が早いため収穫遅れによる「過熟果」の発生が多くなる。
- 果実品質維持のため、収穫日の間隔を短縮し、収穫時の着色基準を厳守する。
- 果実が葉の陰になると、黄種の原因になるため葉除けや玉だしを行う。

《電照管理》

- 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や展葉速度が極端に遅くなった場合は、電照を再開する（2時間程度）。

《病害虫防除》

◎灰色かび病

- 湿度が高いと発病しやすいため、出来るだけ換気を行う。
- 発病した葉や果実は速やかにハウス外に持ち出し、定期的に薬剤防除を行う。

◎うどんこ病

- 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- 軟弱に生育しないように管理し、定期的な予防散布に努める。
- 薬剤散布の際は、葉裏にもしっかりと薬剤がかかるように散布する。

◎スリップス類

- ハウス外からの飛込みが増えるため、発生状況をよく確認する。
- 発生した場合は、ミツバチに影響の少ない IGR 剤（幼虫にのみ効果あり）を中心に、薬剤防除を行う。

◎ハダニ類

- ハダニが発生している株は強めに摘葉し、葉かぎした葉はハウス内に放置しない。
- 防除薬剤が葉裏まで付着するよう、薬液量を十分に使用し丁寧に散布する。
- 化学薬剤だけでは、防除に限界があるため、気門封鎖剤も併せて利用する。
- 同一系統の薬剤を続けて散布すると耐性の発達が懸念されるので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

<同一系統の一例>

系統名	薬 剤 名
マクロライド系	コロマイト水和剤（1日）
ピラゾール系	ダニトロンフロアブル（0日）、マイトクリーン（1日）、ピラニカEW（1日）
その他	スターマイトフロアブル（1日）、ダニサラバフロアブル（1日）

（ ）内の数字はみつばちへの影響日数

《親株の管理》

- 3月から株が動き始めるので、早めに下葉の除去を行う。
- 炭そ病は、株の傷口から感染する機会が多いので、下葉の除去後は防除を必ず行う。
- 炭そ病の防除は、発病前からの定期的な農薬散布を基本とし、手入れの後や降雨の前後にも必ず行う。
- 26年産でうどんこ病が多発したほ場では、親株が保菌している可能性が高いことから、うどんこ病防除を実施する。

農薬の登録使用基準を遵守しましょう！